

壺中天

その33 鷗外と蓋がつなぐ縁えにし〈ベルリン②〉

高校教諭(非常勤)、マンホール蓋愛好家 垣下 嘉徳

冬のベルリンの味

ベルリンの冬は寒い。東京より北極に近い北緯52度で、東京のそれは35度。冷えることには違いありません。森鷗外の『舞姫』には、電線に止まっていたスズメが凍死して落下した姿や、暖炉に石炭をくべても厚い壁石から伝わる外気の冷たさの程を描いています。もっとも近年の地球温暖化の影響がありますから、一冬中厳寒ということはないでしょう。

10年前に訪問したのは11月の末でした。冷たい風の中、町はクリスマスマーケットの賑わいにあふれていました。鷗外記念館の副館長のベアーテさんが、『舞姫』ゆかりのポイントに連れていってくれました。初めてブランデンブルク門をくぐり、ウンター・デン・リンデン(『舞姫』の訳では「菩提樹の下」)を歩きました。

途中、小さな屋台の前に立ち、冬のベルリン名物だと、「カリーブルスト」を教えてくださいました。パンにフランクフルトソーセージを挟み、トマトケチャップとカレー粉がかけられていました。ただそれだけですが、庶民の味ソウルフードとして人気があります。ソーセージの茶色に赤いケチャップと黄色いカレー粉という鮮やかな彩りでした。その味はというと、ソーセージが美味しかった。

日が沈むと、冷え方が日中と違って厳しくなります。そこで味わったのがグリュウワインでした。

温めた赤ワインに香料が入っていて甘く飲みやすく、冷え切っていた頬に赤みがさしたようで、身体が暖かくなりました。

きっかけはARD

ベルリン行は、初めての海外個人旅行でした。そのきっかけは、ARD ドイツテレビの取材でした。

2009年1月中旬、ARDは日本国内を取材し、「日本」をテーマにしたルポを数本制作しました。その1本として取材を受け、東京の銀座や北区十条の蓋などについて熱く語りました。そして1月25日、ドイツ国中に放映されました。

たまたまベアーテさんが見ていて、日本に蓋オタクがいると放送局経由で連絡をくれました。数度メールのやり取りをし、来日するというので六本木で待ち合わせました。さすがドイツ人、時間どおりにやってきました。にこやかに手を振りながら近づいてくる女性！女性？メールでのやり取りでしたから、Beate Wondeをビート・ヴォンデと読み、男性と思い込んでいました。しかし、まさかの女性、ベアーテと読むと知りませんでした。

食事では、日本のビールやワインは美味しくないからと駄目出しを受け、「日本の冬は熱燗です」と言われてしまいました。

ベルリンの森鷗外記念館(写真-1)は、フンボルト大学の管理です。鷗外がベルリンで、最初の下宿にした建物で、鷗外が住んだ頃の調度品を集め、

当手を再現しています。また、鷗外をはじめとした資料の収集や情報発信、さまざまなイベントも開催しており、その一つとして、マンホール蓋の写真展が開催されました。

鷗外記念館が縁となり、先月号で紹介した工業技術博物館で写真展を開催した宝飾デザイナーは、夫君と来日しました。そこで、英語のできる三男を通訳として、蓋製造工場の見学や川口市の蓋見学を実施しました。蓋はつながります。



写真-1 ベルリンの鷗外記念館

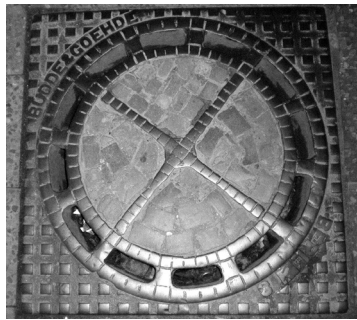


写真-2 Budde & Goehde の
130年以前の蓋



写真-3 ベルリンの名所が描かれた蓋

は、生活環境と病気発生について研究し、上下水道整備の重要性を主張しました。そして、ミュンヘンを中心とした地域の上下水道の整備によって、当時流行していたコレラや腸チフスの拡大に歯止めをかけました。そうしたことにより、衛生学という分野が医学上で重要視されるようになり、ペッテンコーフェルは公衆衛生の第一人者として目されました。ミュンヘン大学で衛生学を開講し、東京大学の衛生学初代教授となる緒方正規や鷗外が学びました。

鷗外はその後ベルリンに移り、北里柴三郎の勧めで衛生試験所に入り、コッホに教を請うことになります。

ベルリンの蓋

ベルリンで鷗外が学んだ頃の蓋も、まだ存在しているでしょう。少なくとも、蓋製造のBudde & Goehde社が倒産する(1930年)以前の蓋がありましたから(写真-2)。

概して、ドイツの蓋は無骨ですが、機械部品のような素朴な美があります。しかし、観光案内のような市内の名所を描いた蓋が、2006年から設置されました(写真-3)。数年前、ベルリンの若者がこの蓋にペンキを塗って、Tシャツに絵柄を写し取る様子がTVニュースとして日本でも流れました。新しい蓋活用の始まりです。

100回目の「鷗外忌」

今年、森鷗外の百回忌です。1922(大正11)年7月9日に60歳で亡くなっています。命日として有名なのは芥川龍之介の「河童忌」、太宰治の「桜桃忌」ですが、鷗外はそのまま「鷗外忌」です。

幼い頃から優秀で、実年齢を2歳も偽って現在の東大医学部の予科に入学しましたが、本科を卒業する時に上位でなかったために、大学にも残れずドイツ留学も叶いませんでした。しかし、友人の勧めもあり陸軍に入ったことで、希望するドイツ留学を果たしています。1884年10月ライプツィヒ大学をはじめとして、ドレスデン、ミュンヘン、ベルリンで研鑽を積みます。1986年にミュンヘンでペッテンコーフェルに師事し、衛生学を学びました。

このペッテンコーフェル(ペッテンコーファー)